论　肝　病　肝病を論ずる

中医治疗肝病的方法甚多，效果也甚好。中国治療肝病の方法は非常に多く、効果は非常に良い。我想就个人的一些心得体会，理论与临床密切结合，将有关肝病的名词、主证、诊法、治则及常用方、药，分为五个部分，比较全面地谈谈肝病的治疗，以期更踏实地打好基本功。私の個人的な想いについては、理論と臨床は密接な結びつきがある。肝病の名詞、主証、診療方法、治則と常用方剤、薬、5つに分け、全面的に肝病の治癒を話し、更に踏み込み基礎的な訓練を実施することを期待するものである。

一、关于肝病名词的含义一、肝病名詞の意味に関して

前人对于肝病有深入的认识，但在名词方面有很多含义不明，有些本来明确的又为后来所误解。先人は肝病が深く入る認識について、ただ名詞の方に多くの意味が不明なことがある。多少もともと明確であっても後でそれが誤解から来たものとなる。。例如生理名词与病理名词混淆，并有作为病名的。例えば生理名と病理名を混同し、合わせて病名をなすと作られたものがある。病名也不一致，有依据肝脏病变的临床表现的，也有依据病因的，依据病变性质的，或者随着病变的发展而随时改变的。病名の不一致は、肝臓の病理変化の臨床表現であり、病因により、病理変化の性質でもある。あるいは病変の進展によって随時変わるものである。此扑，由肝脏病变引起的其他脏腑病证，或由其他脏腑病证牵涉到肝的症状，也往往称为肝病，主次模糊，困果颠倒。このこと（ぶつかり）は、肝臓病の変化によって引き起こした他臓腑の病証、あるいは他臓腑の病証から肝の症状に関連し、よく肝病と称し（間違え）、主次ははっきりせず、その結果顛倒してしまう。我认为在讨论肝病治疗之前，有必要将这些有关肝病名词的概念了解清楚，才能顺利地运用理法来指导临床，做好辨证施治。私は治療の前に論肝病を討論し、これらの関係する肝病の名詞の概念をはっきり調べる必要があり、そのようにして順調に法に照らして臨床を指導することを運用し、弁証施治をしっかりと取り行った。这也是名正则言顺，名不正则言不顺的意思。これは正しく名づければ順と言い、不正を名付ければ不順の意味を言えるのである。

肝　虚　肝　虚　病理名词。肝虚は病理の名詞である。

肝主藏血，一般所说的肝虚多指肝血不足，在临床上肝虚证也以血虚为多见。肝は血を蔵すを主り、一般に肝虚の多くは肝血の不足を指し、臨床上の肝血虚証であり血虚が多く見受けられる。主要症状为：眩晕、消瘦、脉细、舌质淡，及妇女经少、经淡、经闭等。主要な症状は：眩暈、消瘦、脈細、舌質淡、および婦女経少、経淡、閉経などである。

从整个肝脏生理来说，以血为体，以气为用，血属阴，气属阳，称为体阴而用阳。肝臓全体の生理から言って、血は体となし、気は用となし、血は陰に属し、気は陽に属し、体は陰たり、用は陽たりとする。故肝虚证有属于血亏而体不充的，也有属于气衰而用不强的，应该包括气、血、阴、阳在内，即肝血虚、肝气虚、肝阴虚、肝阳虚四种。故に肝虚証は血虧である体の不充実に属し、気衰に属し用は強くなく、まさに気、血、陰、陽を内に含めるべきで、つまり肝血虚、肝気虚、肝陰虚、肝陽虚の 4 種である。正常的肝气和肝阳是使肝脏升发和条畅的一种能力，故称做“用”。正常な肝気と肝陽は肝臓の昇発と条暢の 1 種の能力を用いている、故に“用”と称している。病则气逆阳亢，即一般所谓“肝气”、“肝阳”证；或表现为懈怠、忧郁、胆怯、头痛麻木、四肢不温等，便是肝气虚和肝阳虚的证候。病気になれば気逆陽亢し、つまり一般にいう“肝気”、“肝陽”の証；あるいは倦怠、憂鬱、胆怖、頭痛麻木、四肢不温などを表し、便ち肝気虚と肝陽虚の証候である。《圣惠方》上说：“肝虚则生寒，寒则苦胁下坚胀，寒热，腹满不欲饮食，悒悒情不乐，如人将捕之，视物不明，眼生黑花，口苦，头痛，关节不利，筋脉挛缩，爪甲干枯，喜悲恐，不得太息，诊其脉沉滑者，此皆肝虚之候也。“《聖恵方》上に言う：“肝虚すれば寒を生じ、寒すれば脇下堅脹、寒熱、腹満し飲食を欲せず、うつうつと情が楽にならず、もし人が之を捕えるならば、視物不明、眼生黒花、口苦、頭痛、関節の不利、筋脈の攣縮、爪甲干枯、喜悲恐、ため息を得ない、その脈沈滑者を診て、これは全て肝虚の症候である。と。这里包含肝血和肝气两者俱虚，所以说“肝虚则生寒“，寒即阳不足的意思。“ここに肝血と肝気の両者を含みともに虚すのは、いわゆる“肝虚すれば寒を生じる”、寒はつまり陽の不足の意味である。这一点对治疗肝病十分重要，如果把肝气和肝阳作为病理名词，都从病理方面去研究而忽视了生理方面的主要作用，并在肝虚证上只重视血虚而不考虑气虚，显然是不全面的。この点は肝病の治療に対して非常に重要であり、もし肝気と肝陽を病理の名詞にするならば、すべて病理の方面から去り研究し生理の方面の主要な効果を軽視し、そして肝虚証上で血虚を視ることが重く気虚を考慮しない、明らかに是れは全面的ではない。

在生理和病理上如何来区别“肝气”和“肝阳”及“肝血”和“肝阴”？生理と病理上にあってどのように“肝気”と“肝陽”及び“肝血”と“肝陰”を区別するのか？我的体会，肝阳、肝阴是以肝气、肝血作为基础。私の体得したことは、肝陽、肝陰は肝気、肝血のの基礎となることを作る。前人在实践中认识到肝脏气血存在着两种不同的作用，就称为肝阳和肝阴，类似于肾命水火的区分为肾阳和肾阴。先人は実践の中で肝臓の気血が 2 種類の異なる効果が存在していることを理解し、肝陽と肝陰と称し、腎を水火に区分し腎陽と腎陰になるように命じることに類似している。所以从肝脏的气血来说，血为体，气为用，从整个肝脏来说，气血是体，阴阳是用。いわゆる肝臓の気血から言って、血は体となし、気は用となし、肝臓全体から言って、気血を体とし、陰陽を用とする。肝阳、肝阴绝对不是在气血以外的一个抽象名词，也不能与肝气、肝血分离。肝陽、肝陰は絶対に気血の以外の 1 つの抽象的な名詞ではなくて、肝気、肝血の分離をする能ずと。

肝　气　肝　気　生理和病理名词，亦为病名。生理と病理の名詞、同じく疾病のために名づける。目前均作病理名词和病名，指肝脏的作用太强及其产生的病证。現在皆病理の名詞と病名は等しく、肝臓の作用の太強と病証の産生を指すものである。肝气病的形成，多因精神上经受刺激，肝脏气机不和，出现横逆现象，进一步影响到其他内脏。肝気病になる形成、多くは精神上の経が刺激を受け、肝臓の気機は不和を起こし、横逆現象の出現、更にその他内臓に影響するものである。

《类证治裁》所谓："肝木性升散，不受遏郁，郁则经气逆，为暖，为胀，为呕吐，为暴怒胁痛，为胸满不食，为飧泄，为@疝，皆肝气横决也。《類証治裁》は謂う："肝木の性は昇散、遏鬱を受けないで、郁すれば気逆を経て、暖、脹れ、嘔吐、暴怒の脇痛、胸満不食、飧泄、@疝、全て肝気の横決である。"它的主要症状，为胸胁胀满作痛，少腹胀痛，妇女乳房胀痛等。"その主要な症状は、胸脇脹満作痛、少腹脹痛、婦女の乳房の脹痛などである。其中尤以作胀为特征，先因气机阻滞，然后作痛，故肝气病有胀而不痛的,没有痛而不胀的。その中でとりわけ作脹が特徴になり、先に気機の阻滞のため、それから作痛、故に肝気病には脹れがあって痛まず、痛みがなくして脹れがないものである。它的发病，多从本脏本经部位开始，以两胁及少腹最为明显，然后循经扩散，上及胸膺，下及前阴等处；再影响脾胃，出现食呆、嗳噫、呕恶、泄泻等消化不良证，即常说的"木克土"之候。その発病は、多く本臓の本経の部位から開始し、以て両脇から少腹に及ぶのが最も明らかで、それから経を循って拡散し、上って胸膺におよび、下って前陰などの所に；再び脾胃に影響し、食呆、嗳噫、呕恶、泄泻等の消化不良証が出現し、すなわち常に言う"木克土"である。并因气机阻滞，使情志佛逆不畅，引起恼怒、急躁等精神不安现象。併せて気機阻滞のため、情志の拂逆不暢をして、脳怒、急躁などの精神の不安の現象を引き起こす。

相反地，假如受了精神刺激之后，不出现肝气横逆而出现肝气郁结现象，虽然同样是气分的病,便不称肝气，而称为"肝郁"了。かえって、もしも精神の刺激の後に受けるなら、肝気横逆が出現せず肝気鬱結する現象が出現し、同様な気の分ける疾病だが、便ち肝気と称しないで、"肝郁"と称した。关于肝郁将在下面再说，这里要说明的是，肝郁不舒可以转化为肝气病，但肝气已经横逆，不可能转变为肝郁。肝郁に関して以下で再び説明する。これらの説明は、肝郁が快適ではなく肝気病に転化し、ただ肝気がすでに横逆し終わっているので、転じて肝鬱となることはあり得ない。同时，肝气犯胃克脾可以用木克土来解释，肝郁也能影响脾胃，系属"木不克土"，不能一例看待。同時に、肝気犯胃の脾を剋し以て木剋土を用いる解釈において、肝郁は脾胃に影響し、"木は土を剋さず"の系に属し、ひとつの例と評価することができない。无论肝郁和肝气病，必须注意到肝脏以气为用的生理方面，只有从生理方面来考虑调整肝气的功能,才能避免疏气利气耗散太过而造成肝气的正常功能受到损害。無論、肝郁と肝気病に関わらず、気は用たりの生理の方面で必ず肝臓に気づかなければならなく、生理の方面から肝気の機能を調整することを考慮し、そうして気利気耗を大過に散して、肝気の正常咬合機能が損害を受けることをもたらすことを免れることができる。

肝　火　肝　火　病理名词，亦为病名。病理の名詞、また病名でもある。凡肝脏机能亢进，出现热性及冲逆现象的，概称“肝火”。すべて肝臓機能亢進、熱性の出現および逆現象に突き進み、一切“肝火”と称する。引起肝火的原因为肝脏蕴热，或由肝气转化，所谓“气有余便是火”，故有时称做“气火偏旺”。肝火を引き起こす原因は肝臓の蘊熱となり、あるいは肝気の変換から、いわゆる“気の有余は便ち是れ火なり”、故に時には“气火偏旺”と称することがある。由于火性炎上,其症状以头痛昏胀，面热面红，口苦，目赤，耳鸣等最为常见。火性の炎上のため、その症状は頭痛昏脹、面熱面紅赤、口苦、目赤、耳鳴などが最も常見される。冲逆无制，并能影响其他内脏，出现更多的病证。逆らうことに向って制がなく（衝逆無制）、そしてその他の内臓に影響し、さらに多い病証を出現する。所以《类证治裁》上说：“木郁则化火，为吞酸胁痛，为狂，为痿，为厥，为痞，为呃噎，为失血，皆肝火冲激也。”很明显，这些病证，有的是肝火直接产生的,有的是其他内脏受肝火影响形成的，虽然病因同是肝火，病位并不相同。だが《類証治裁》上に言う：“木郁すれば化火し、呑酸脇痛、狂、痿、厥、痞、呃噎、失血となる、全て肝火の激しく突き進んだものである。”と。とても明らかで、これらの病証、肝火の直接な発生があり、その他の内臓が肝火の影響の形成のを受けることがあり、病因は肝火だが、病位は同じではない。

肝火来势急骤，在临床表现都为实证，因而一般治法采取苦寒直折。肝火の勢いはせわしく、臨床表現ですべて実証である、そこで一般的な治法は苦寒を直に折り取る。但另一方面，火能伤阴，营血、津液受其消烁，往往伴见咽干，大便秘结，小溲短赤等。しかし一方、火は傷陰し、栄血、津液は爍がそれに消されて、往々にして咽干、大便秘結、小溲の短赤などを受ける。故从肝火的本质和发展来看，也须注意到阴虚的一面，前人泻肝方剂里经常佐入生地、白芍一类，便是为此。故に肝火の本質と発展を見ると、陰虚の一面に気づいて、先人は瀉肝方剤の中でよく佐（君臣佐使の佐）に生地、白芍の一類を入れる、便ち是れはこのためである。

肝　热　肝　熱　病理名词。病理の名詞。“肝热”和“肝火”的性质相同，但在临床上，肝热多指烦闷，口干，手足发热，小便黄赤等，无冲激上逆现象。“肝熱”と“肝火”の性質は同じ、しかしある臨床上、肝熱は多く煩悶、口干、手足の発熱、小便黄赤などを指す。衝激な上逆現象は無い。因此我的体会，静则为热，动则为火，肝热与肝火的意义不同，在程度上也有差别。そのため体得したこと、静かなのは熱で、動くのは火で、肝熱は肝火を与えるの意味と違い、程度上での違いがある。引起肝热的原因,有外感温邪传变的，如《内经》上说：“肝热病者，小便先黄，腹痛，多卧，身热，热急则狂言及惊，胁满痛，手足躁，不得安卧。”有因外邪伤肝和气郁化热的，当其化热内伏，或有化火倾向而没有冲逆的时候，称为“郁热”，或称“郁火”。肝熱の原因を引き起こし、外感温邪の伝変があり、もし《内経》上で言うならば：“肝熱を病む者、小便先黄、腹痛、横臥多く、身熱、熱くて急ぎ狂気じみた言葉と驚かすこと、脇満痛、手足躁、安臥を得ない。”と。外邪によって傷肝と気郁化熱は、その化熱が内に伏せ、あるいは化火の傾向があり衝逆の時候を、“郁熱”と称し、あるいは“鬱火”

と称している。也有因肝主藏血，血虚生内热，其特征为午后潮热，手足心灼热汗出。原因のある肝は蔵血を主り、血虚は内熱を生じ、その特徴は午後の潮熱、手足心が熱に灼かれ汗が出る。凡肝脏郁热，亦易暗耗营血，所以经久不愈，能变虚证。すべて肝臓の郁熱、また同じく営血を暗耗しやすく、だから久しく経っても癒らず、よく虚証に変わる。这种因郁热转变的虚热，和血虚而产生的虚热，由于病机不一样，治法有所出入。このような郁熱が転化し虚熱となり、血虚の発生の虚熱は病機が一様でなく、治法はある程度出入する。

肝　阳　肝　陽　生理和病理名词，亦为病名。生理と病理の名詞、また同じく病名である。目前均作病理名词和病名,很少考虑生理方面。現在皆病理名詞と病名を等しく作り、少し生理方面を考慮する。其实肝阳这一名称是从生理来的，如前所说，肝脏的功能有阴和阳两种表现，在临床上遇到阳的作用有浮动现象，便称做“肝阳”证。実は肝陽であるこの名称は生理から来て、前に述べたように、肝臓の機能は陰と陽の 2 種類の発現があり、臨床上で陽の効果が変動現象があることに出会う、便ち“肝陽”の証を語っている。引起肝阳浮动的原因，一为肝热而阳升于上，一为血虚而阳不潜藏。肝陽の変動原因を引き起こし、一つに肝熱となして陽は上に升り、一つには血虚のために陽は潜み蔵することができない。它的主要症状，为头晕微痛，目眩畏光，恶烦喜静，并暑惹动胃不和降，泛漾呕恶。その主要な症状、頭暈微痛、目眩畏光、悪煩喜静、そして暑く誘発して胃不和で降に動き、現れる嘔悪があふれる。但是，肝热引起的肝阳可兼血虚，血虚引起的肝阳亦多见内热，两者不能绝对分开。しかし、肝熱の引き起こす肝陽は血虚を兼ねることができ、血虚の引き起こす肝陽も多く内熱が見られ、両者は絶対に分け開くことができない。所以分别来说，前者偏于实，后者属于虚；总的来说，肝阳的性质近于热，基本上是一个虚证。だから分け、前者は実に偏り、後者は虚に属する；総じて言えば、肝陽の性質は熱に近く、基本的には一つの虚証である。必须说明，前面说过肝阳虚则表现为胆怯、头痛麻木、四末不温等现象，这里又说性质近于热，是不是有矛盾呢？必ず説明しなければならなく、前に肝陽虚すればの表現は胆怯、頭痛麻木、四末温まらず等の現象があり、ここはまた性質が熱に近いと言って、矛盾があるのではないか？不是，肝阳证是指血虚和内热而阳升，肝阳的本身并不虚，如　果肝阳本身虚而发病，它的性质显然不同。そうではなく、肝陽証は血虚と内熱で陽升し、肝陽の本は虚とならない、もし肝陽の本身が虚するならば発病して、その性質は明らかに異なる。

所以肝阳证用清滋柔镇，使其潜降；肝阳本身虚的，必须温养以助其生发的能力。だから肝陽証には清滋柔鎮を用い、それを潜んで下がらせ；肝陽本身の虚は、必ず温養をしその発生の能力を助けなければならない。《临证指南医案》上指出：“凡肝阳有余，必须介类以潜之，柔静以摄之，味取酸收，或佐咸降，务清其营络之热，则升者伏矣。”这种治法，完全符合于肝阳的病理，也说明了它的本质。《臨床指南医案》上に指摘している：“すべて肝陽有余は、必ず種類に介在して潜まなければならなく、柔静は之を摂取して、味は酸収を取り、あるいは咸降を助けて、必ず清は其の栄絡の熱をさませば、

升なる者は伏せることができる。”と。このような治法は、完全に肝陽の病理に合い、それはその本質を説明している。

肝　风　肝　風　病理名词，亦为病名。病理の名詞、また病名でもある。肝为风木之脏，血虚则生燥生风，称为“肝风”；因其不同于外来之风，亦称“内风”。肝は風木の蔵であり、血虚すれば燥を生み風を生んで、“肝風”と称する；それが外来の風と異なるならば、“内風”と称する。风性动摇，它的主要症状多指眩晕欲仆，耳鸣，肢麻，抽搐，亦常引起呕恶、心悸等证。風の性は動揺であり、その主要な症状は眩暈し倒れんと欲し、耳鳴、肢体麻痺、抽蓄、常に吐悪、心悸などの証も引き起こす。故《内经》上说“诸风掉眩，皆属于肝。”《类证治裁》也说:“风依于木，木郁则化风，为眩，为晕，为舌麻，为耳鸣，为痉，为痹，为类中，皆肝风震动也。”又说：“肝阳化风，上扰清窍，则巅痛，头晕，目眩，耳鸣，心悸，寤烦。”临床上概称为肝风证。故に《内経》上、“諸風の掉眩は、全て肝に属する。”と説明している。《類証治裁》で言うに:“風は木に従って、木郁は風に化し、眩、暈、舌麻、耳鳴、痙、痺、類中となり、全て肝風の震動である。”と。また言うに：“肝陽化風が、上って清竅に迷惑をかければ、巓痛、頭暈、目眩、耳鳴、心悸、寤煩となる。”と。臨床上は一切肝風証と称している。

“肝风”和“肝阳”是两个证候，习惯上又以肝风都由肝阳所化，所谓“肝阳化风”，又叫“厥阳化风”，因而常把“风”和“阳”结合起来。“肝風”と“肝陽”の証候は、習慣上また肝風すべてで肝陽の化からと言って、いわゆる“肝陽化風”、また“厥陽化風”と言い、よって常に“風”と“陽”は結合すると把握している。我认为肝阳是血虚内热而阳浮的一种证候；肝风是纯粹一种虚象，不仅肝血虚而且肾阴亦虚，由于阴血极虚而不能濡养空窍和肢体，故出现震动不定现象。私は肝陽の血虚内熱と陽浮の一種の証候と思っている；肝風は全く一種の虚像であり、肝血虚だけではなければ腎陰はまた虚にして、陰血がきわめて虚し肢体の空竅に濡養できず、故に震動が出現するはずである。虽然与肝阳有共同之处，实际上大有区别。依然として肝陽は共通の場所があるだけでなく、実際には違いがたくさんある。临床证明，肝阳轻者用清热潜镇，重者佐以养肝；肝风则必须填补肝肾，滋液养阴，虽然也有镇静的治法，用药亦不同于肝阳。臨床証明として、肝陽の軽い者の用は清熱潜鎮を、重い者は養肝を助ける；肝風ならば必ず肝腎を補なわなければならなく、滋液養陰する、鎮静な治法もあるが、用薬はまた肝陽と異なる。为此，我意味着一般所说的风阳，系指肝阳的严重证候，真正的肝风，不能与肝阳混为一谈，主要是无阳可潜，亦无风可熄。このために、私は一般的に言った風陽を意味して、肝陽の重証候を指して言い、真正の肝風、肝陽を能ずといっしょにして、主要な是のことは潜むことができる陽がなく、同じく息すべき風がないことである。。

肝　寒　肝　寒　病理名词。病理名詞である。引起肝寒有两个原因:一为直中寒邪，使肝脏气血凝滞，表现为四肢厥冷，腹痛，指甲青紫，脉象细弦或沉细欲绝，病来急骤。肝寒には二つの原因が

ある:寒邪の直中、肝臓気血の凝滞になり、四肢厥冷、腹痛、爪の青紫色、脈象細弦あるいは沈細にして絶えんと欲すとして表れ、病は来るのが速い。一为肝脏本身阳虚，机能衰弱，表现为懈怠不耐劳。もう一つは、肝臓の本身の陽虚で、機能の衰弱を起こし、表現として倦怠や労に耐えられないとなる。忧郁胆怯，四末不温，脉象沉细而迟，多由逐渐形成。擾郁胆怯、四末の不温、脈象沈細にして遅、多くは次第に形成する。这里所说肝脏本身阳虚，即生理方面的肝阳不足，所以呈现机能衰弱，属于虚寒。この肝臓本身は陽虚で、つまり生理方面の肝陽不足して、そのため機能の衰弱が現れ、虚寒に属する。治疗虚寒，应在补“体”之中加人温养，不同于受寒的专用辛温通阳。虚寒の治癒は、“体”を補う中に応じて温養に加入し、寒を受ける専用の辛温通陽と同じではない。这是治疗的原则，其他内脏都是如此。この治療原則は、その他の内臓すべて是のようである。上面已经反复提出生理上肝阳的重要性，如果把肝阳虚和肝受寒相混，会影响治疗效果。上記ですでに繰り返し生理上の肝陽の重要性を述べた、もし肝陽虚と肝の受寒を互いに混じるならば、治療効果に影響する。

肝　郁　肝　郁　病理名词，亦为病名。病理名詞であり、病名でもある。指肝脏气血不能条达舒畅。肝臓気血で条達舒暢ができないことを指し示す。一般以气郁为先导，先由情志郁结，引起气郁，影响血行障碍，成为血郁。一般には気郁を先導にして、先に情志のから鬱積、気郁を引き起こして、血行障害に影響のし、血流停滞になる。在气表现为闷闷不乐，意志消沉，胸胁苦满，饮食呆钝；在血则增胁痛如刺，肌肉消瘦，及妇女月经不调等。気の表現では悶々憂鬱で、沈み込んで、胸脇苦満、飲食は停滞して動きがない；血なら刺すような脇痛を増して、肌肉の消瘦、および婦女の月経不順などを表す。肝气郁结与一般肝气证恰恰相反，肝气证是作用太强，疏泄太过，故其性横逆；肝气郁结是作用不及，疏泄无能，故其性消沉。肝気郁結は一般の肝気証の正反対、肝気の証の是れ効果の太強、疏泄は大過にして、故にその性の横逆なふるまい；肝気郁結は作用不及、疏泄無能で、故にその性は消沈する。同时，肝气证能犯胃克脾，出现消化不良等证，乃属木旺克土；肝气郁结也能影响中焦，出现痞满等脾胃证状，则系木不疏土。同時に、肝気証は犯胃剋脾をし、消化不良などの証を出現する、すなわち木旺剋土に属することである；肝気鬱結は中焦に影響し、痞満の出現など脾胃の証状なれば、木は土を疏散せずということにかかわる。所以肝气和肝郁同样是肝脏的气分病，同样应用理气、调气方法，由于性质的不同，用药就有出入。いわゆる肝気と肝郁の同様さは肝臓の気分病であり、同様に理気、調気の方法を用い、性質の異なるため、用薬は出入することがある。肝郁证的另一特点，由于情志忧思郁结，气机不舒，久则化热，这种热也郁伏于内，不易发泄，出现急躁忧愤，小便黄赤等，不同于肝火的冲激。肝郁証のもう一つの特点は、情志の擾思郁結のため、気機の不舒、久しくなれば化熱して、このような熱は内に郁伏して、発散しにくく、急躁の擾憤、小便黄赤などを出現し、肝火の衝激と異なっている。热郁于内则耗气烁血，逐渐体力衰退，出现潮热、盗汗、失眠、惊悸、妇女月经涩少等虚劳证候。熱郁が内なれば気爍血を消耗し、次第に体力の衰退、潮熱、盗汗、失眠、驚悸、婦女の月経が渋くて少ない等の虚労証を出現する。故综合肝郁证的全部过程，其始在气，继则及血，终

乃成痨。故に肝郁証の全部の過程を総合して、それは気で始まって、継いで血におよび、結局最後は痨と成る。也就是说，肝郁初起本在气分，亦非虚证，在逐步发展中，可以影响血分，成为虚证。つまり、肝郁は初め本で起き気分にあり、また虚証ではなく、次第にだんだん発展する中で、血分に影響し、虚証になる。诚然，在这病程中，肝气郁结也能化为肝气，肝郁生热也能化为肝火；但当肝郁和肝热没有化为肝气和肝火，或者已经化为肝气和肝火，截然是两个阶段，两个证候，不容含混。確かに、この病程の中で、肝気郁結は肝気に変わることができ、肝郁の生熱は肝火に変わることができる；しかし肝郁と肝熱はまさに肝気と肝火に変わる時にあらず、あるいはすでに化して肝気と肝火に変わり、はっきりこの二つの段階は、二つの証候、形態はあいまいである。

至于肝属木，肝郁也称木郁。肝は木に属するとなると、肝郁は木郁と称する。但在《内经》所说的木郁，属于运气学说，指自然界气候变化的现象，为“五郁”之一。しかし《内経》の木郁では、運気学説に属して、自然界の気候の変化の現象を指し、“五郁”のひとつとなる。《医贯》所说东方生木，火气附焉，木郁则土郁，土郁则金郁，金郁则水郁，水郁则火郁，是从五行相因的道理，认为治木则诸郁皆愈。《医貫》では東方が木を生み、火気に付き、木郁なれば土郁となり、土郁なれば金郁となり、金郁なれば水郁となり水郁なれば火郁となる、是れは五行の様子がの道理のためであり、木郁が治れば全ての郁が治癒する。又如肝郁以气为主。また肝郁のように気を主とする。一般多从气郁考虑，但《丹溪心法》所说气郁则湿郁，湿郁则热郁，热郁则痰郁，痰郁则血郁，血郁则食郁，指一般的病理变化，称为“六郁”。一般に普通は気郁から考慮することが多く、しかし《丹溪心法》では気郁すれば湿郁となり、湿郁なれば熱郁となり、熱郁なれば痰郁となり、痰郁なれば血郁となり血郁なれば食郁となる。一般の病理変化を指し、“六郁”と称する。这些“木郁”、“气郁”的名称，使用上各有不同的含义，讨论肝郁证时可以作为参考，不能认为都指肝郁而言。これらの“木郁”、“気郁”の名称、それぞれ違う意味を使って、肝郁証を討論する時行為の参考となり、すべて肝郁を指すと言うことをではない。

肝　厥　肝　厥　病名。病名。“厥”有三种意义:一为气自下逆上，二为手足逆冷，三为昏仆不省人事。“厥”には三種類の意味がある:ひとつは気自らの下りと逆上であり、二つ目は手足逆冷で、三つ目は意識がなくなり不省人事となることである。一般所说的肝厥，不止一个证候，但不外这三种现象。一般の肝厥は、ひとつの証候に止どまらないが、ただこの三種類の現象は外にならない。如忿怒引起的“气厥”，证见猝然昏倒，牙关紧闭，手足不温，形似中风；肝阳上扰引起的“晕厥”，证见头目运旋，昏倒不省人事，汗出，面白，肢冷；肝火上冲引起的“薄厥”，证见猝仆面赤，气道不利，喉有痰声，脉象弦劲而数，以及肝肾阴虚、内风引起的“痉厥”，证见神昏，舌蹇，烦躁，手足抽搐，时时欲脱等，临床上概称肝厥。もし憤りから引き起こす“気厥息”、弁証は突然意識が無くなり倒れ、牙関緊急、手足の不温、中風に似た形；肝陽上擾は“暈厥”を起こし、証は頭目の運旋、不省人事で倒れる、汗出、面白、肢冷；肝火上衝の引き起こす“薄厥”、証は突然面赤で倒れ、気道不利、喉は

痰声があり、脈弦にして数、および肝腎陰虚に及び内風を引き起こし“痙厥”、証は神昏、舌の不自由、煩躁、手足抽蓄、常に脱ぎたいと思い、臨床上はおおむね肝厥と称している。《中国医学大辞典》上解释肝厥为“肝邪张炽而厥”，认为“多因平素阴虚肝旺，易于恼怒，偶有佛意事刺激，辄致手足厥冷，呕吐昏晕，状如癫痫，不省人事，治宜安神、熄风、疏肝、解郁。”将各种肝厥证候混而为一，未免含糊。《中国医学大事典》上での肝厥の解釈は“肝邪の張が激しく厥する”であり、“多くふだん陰虚肝旺なため脳怒しやすく、ときたま佛意事の刺激があって、いつも手足厥冷し、嘔吐めまいがして、形は癲癇のようであり、不省人事のごとくし、安神、熄風、疏肝、解郁で治療すべきである。”各種の肝厥証候を混じりて一つにするのは、少しあいまいだ。

肝　实　肝　実　病理名词。病理名詞である。凡肝寒、肝热、肝气等不属于虚证者，概称为肝实。すべて肝寒、肝熱、肝気などは虚証に属しないで、一切肝実と称する。如《内经》上说:“肝气实则怒”。もし《内経》上に言うならば:“肝気実すれば怒る”と。又说:“肝实则两胁下痛引少腹，善怒”。また言う:“肝実は両脇下の痛みは少腹に引いて、善く怒る”。在临床上应将肝实的原因明白指出，不能统而言之。臨床上、肝実の原因が分かることに応じて指摘している。

肝　积　肝　積　病名，系五脏积聚之一，指肝脏体积增大，按之有形。病名、五臓の積聚の一つ、肝臓の体積が増大し、これを按じて形があることを指す。《难经》上说“肝之积名曰肥气，在左胁下，有头足，久不愈，令人咳逆，痃疟，连岁不已。”《難経》上に“肝の積名は肥えた気と曰くと名づけ、左脇下に在り、頭足が有り、久しく治らず、人をして咳逆をさせしめ、痃瘧、歳に連なり終わらない。”と言う。后来论肝积的都以此作为依据。それから論ずる肝積はすべてこの作に根拠する。我认为《难经》里还指出脾积:“脾之积名曰痞气，在胃脘，复大如盘，久不愈，令人四肢不收，发黄疸，饮食不为肌肤。”　私は《難経》の中で脾積を指摘すると思っている:“脾の積は名づけて痞気と言い、胃脘に存在し、また大きく盤のようで、久しく治らず、人の四肢を受け入れなくならせて、黄疸を発し、飲食は肌膚とならない。”と。这两条的肝、脾两字应当对调，即肝之积名曰痞气，脾之积名曰肥气。この二つの条文の肝、脾の二字は交換するべきで、つまり肝は積之名づけて痞気と称し、脾の積と名づけて肥気と言う。对调以后，不但部位正确，在命名上肝积先由气滞不舒，故称痞气，脾脏肿大可以发展极广，故称肥气，亦较惬当。変えた後に、部位は正確なだけではなく、命名上、肝積は気滞不舒を先にする、故に痞気と称し、脾臓の腫大が発展し極めて広くなり、故に肥気と称する、また比較的満ち足りるのである。特别是证状方面，肝脏肿大的患者，一般均有疲劳感，手足沉困，饮食减少，形体消瘦，经久不愈，往往发生黄疸及鼓胀等证。特にこの証の形の方面は、肝臓の腫大の症例で、一般に皆疲労感があり、手足の沈困、飲食は減らし、形体の消瘦、長く治らず、よく黄疸と鼓脹などの証になる。而在脾脏肿大，如“疟母”一类，常因疲劳引起寒热。そして脾臓の腫大は、“瘧母”の類のようで、常に疲労が寒熱に引き起こされる。为此，我怀疑经文传写有误，特提出讨论。このために、私は経文の転写が書き間違いがあることを疑って、特に討論をしている。

肝　着　肝　着　病名。病名である。见《金匮要略》:“肝着，其人常欲蹈其胸上，先未苦时，但欲饮热，旋复花汤主之。”　《金匱要略》に見られる:“肝着、其の人は常にその胸を踏んで上りたいと思い、先に苦くなっていない時、ただ熱い飲みたく、旋覆花湯を使う。”と。这是肝脏气血郁滞，留着不行的证候，故用下气散结、活血通络的治法。この是れらの肝臓の気血郁滞は、滞っていて、駄目な症候を残し、故に用が気を下して散結し、活血通絡の治法とする。但肝症状不明显，不可能诊断为肝病，因而怀疑兼有胁部痞满胀痛现象。しかし肝の症状は明らかではなく、診断は肝病であることであり得なく、そこで兼有の脇部の痞満脹痛の現象を疑う。也可能先由肝寒气滞，累及其子，致使心阳不振，影响肺气不畅，故初起时得到热饮轻减的，已经转变为非重揉重捶不可。恐らく先に肝寒気滞によって、積み重ねることとその子、心陽不振に至り、肺気不暢に影響し、故に初めて起きる時温かい飲み物を得て軽く減らして、すでに経に転変し重い揉み重い叩きができないにあらずとなる。方内用旋复、新绛、葱管，主要是从上焦通阳、活血、顺气。方剤は内れる旋覆、新絳、葱管を用いて、主要なことは上焦の通陽、活血、順気にする。这是我初步体会，一并提供讨论。是れは私は一応体得し、合わせて討論を提供する。

肝咳、肝胀、肝水、肝痹、肝疟　均病名。肝咳、肝脹、肝水、肝痺、肝瘧は皆病名である。这些病名散见于《内经》和《金匮要略》，系咳嗽、胀满、水肿、痹痛、疟疾之兼见肝经症状者。これらの病名は《内経》と《金匱要略》に散見され、咳嗽、脹満、水腫、痺痛、瘧疾に関わり兼ねて肝経症状が見られる者である。这是前人对于证候用脏腑分类的习惯，在病机上治疗上仍然以主病、主脏为主，不能错认为肝脏疾患。これら先人は症候の臓腑分類を用いる習性について、病機に在って治療上なお依然として主病に、主臓を主とし、認識を錯誤せず肝臓の疾患となしている。比如咳嗽是肺的病证，见到胁痛或胁肋胀满便称为“肝咳”，主要是治肺止咳，佐以调肝。たとえば咳嗽は肺の病証で、脇痛あるいは脇肋脹満が見られればすなわち“肝咳”と称し、主要なことは肺の止咳を治療し、佐として調肝をする。其他如“肝胀”证系胀满而兼见胁满痛连少腹；“肝水”证系水肿而兼见胁下腹中痛，不便转侧；“肝痹”证痹痛而兼见睡眠惊惕；“肝疟”证系疟疾而兼见色苍、太息等。もし他の“肝脹”証が脹満に関われば兼ねて脇満痛が少腹に連なることが見られる；“肝水”証の水腫に関わり兼ねて脇下腹中痛が見られれば転側するのに都合が悪い；“肝痺”証の痺痛すれば兼ねて睡眠驚惕が見られる；“肝瘧”証の瘧疾に関わって兼ねて色蒼くため息が見られる。后来还有痫证兼见面青、唇青，疳积证兼见筋青、脑热等肝证状者，称为“肝痫”、“肝疳”之类，意义相同。それからさらに癇証に面青、唇青を兼ね、疳積証に筋青、脳熱などの肝証の状態の者は“肝癇”、“肝疳”の類と称して、意味は同じだ。

上面举了一些肝病名词，有属于生理的，有属于病理的，也有属于病名的，在病名方面又有主次的不同。上はいくつか肝病の名詞を挙げて、生理に属することがあり、病理に属することがあり、病名に属するもあり、病名の方面にまた軽重の異なることもある。我认为治疗肝病，必须分辨，含糊不

得。私は肝病治癒を思うに、必ず見分けなければならなく、いい加減にしてはならない。同时，我们有责任来加以整理，统一认识。同時に、私達は整理する責任があり、認識を統一する。